

## メッセージアウトライン サムエル記第一7:1～17

### 「サムエルの祈り」

[1]「キルヤテ・エアリムの人々は来て、主の箱を運び上げ、丘の上のアビナダブの家に運んだ。そして、主の箱を守るために彼の息子エルアザルを聖別した」

主の箱はペリシテ人との戦いで奪い取られたが、主なる神は無力ではなく、死んでもおられない。主は、神の民としてのイスラエルが神とは遠く離れ、それぞれ好き勝手に不信仰な生き方を長い年月続けてきたがゆえにペリシテ人を用いてさばかれたのであった。しかし、主はどこにおられても聖であり、力あるお方である。ペリシテ人の地においても主の御手が彼らの上に重くのしかかり、多くの者がねずみによる伝染病で死に、そうでない者も腫物ができて非常に苦しめられた。それゆえペリシテ人は主の箱をイスラエル人の地に送り返すことにした。それは最初ベテ・シメシュに到着した、民は喜んだが、彼らは主の箱の中を見た。それは律法で禁じられていたことであり、そのため七十人が主に打たれて死んだ。それで彼らは主の箱をキルヤテ・エアリムに回すこととしたのであった。

キルヤテ・エアリムはベテ・シメシュから見て山地であり、それゆえ、文字通り、主の箱はキルヤテ・エアリムの地に運び上げられ、丘の上のアミナダブの家に運ばれ、彼の息子エルアザルが聖別され、主の箱を守ることとなった。「聖別」とは主に仕えるにふさわしく身をきよめること。アビナダブは「わが父は高尚である」の意。彼は主に仕えるレビ族であったと思われる。その息子エルアザルは「神は助けてくださった」の意。

[2]「箱がキルヤテ・エアリムにとどまった日から長い年月がたって、二十年になった。イスラエルの全家は主を慕い求めていた」

この二十年の間、サムエルは沈黙していたのではなく、繰り返し、イスラエルの民に、不信仰を捨てて主に立ち返るようにと教え続けてきたことであろう。それで、ようやく民は自分たちに起こった災いやペリシテ人の圧迫は自分たちの信仰的墮落のゆえであり、主なる神のさばきであったということに気づいてきたことであろう。そして彼らは主を慕い求めるようになったのである。

[3-4]「サムエルはイスラエルの全家に言った。『もしあなたがたが、心のすべてをもって主に立ち返るなら、あなたがたの間から異国の神々やアシュタロテを取り除きなさい。そして心を主に向け、主にのみ仕えなさい。そうすれば、主はあなたがたをペリシテ人の手から救い出してくれます。』」

ここにはイスラエルの敗北の真の原因とその解決が述べられている。

<原因>

①主のほかにバアル(豊かな産物をもたらす農業神)やアシュタロテ(バアルの連れ合い。肥沃と戦争の女神)などの異教の神々を礼拝していた。

②主に対して心を向け切っていなかった不信仰。

<その解決>

①偶像礼拝をやめ、実際に異教を捨てる。

②心を主に向け、主にのみ仕える。そのために具体的な行動が必要である。

[5-6]「サムエルは言った。『全イスラエルを、ミツパに集めなさい。私はあなたがたのために主に祈ります。』彼らはミツパに集まり、水を汲んで主の前に注ぎ、その日は断食した。彼らはそこで、『私たちは主の前に罪ある者です』と言った。こうしてサムエルはミツパでイスラエル人をさばいた」

「ミツパ」…キルヤテ・エアリムから北東に約10キロメートルの地と思われる。

「水を汲んで主の前に注ぎ」…水はイスラエル人にとって貴重なものであった。これは心を注ぎだすことの象徴的行為。→ I サムエル1:15 「断食」…食事を断ち、罪を悔い、へりくだること。どちらも真剣な悔い改めを表すものである。彼らは表面的、形だけではなく、心底から「私たちは主の前に罪ある者です」と告白した。このような姿勢こそ、主なる神が彼らに求めておられたことである。ようやく彼らはイスラエル再生のスタート地点に戻ったと言えよう。また、断食したのはその日だけであったとしても、この悔い改めの集會は何日も続いたことであろう。

「サムエルは…さばいた」…民の指導者として統治したという意味。ここには裁判官としての働きも含まれる。

[7-8]「イスラエル人がミツパに集まったことをペリシテ人が聞いたとき、ペリシテ人の領主たちはイスラエルに向かって上って来た。イスラエル人はこれを聞いて、ペリシテ人を恐れた。イスラエル人はサムエルに言った。『私たちから離れて黙っていないでください。私たちの神、主に叫ぶのをやめないでください。主が私たちをペリシテ人の手から救ってくださるようにと。』」

サムエルはイスラエルの指導者であるとともに、人々を主の前にとりなす祈りの人でもあった。ペリシテ人たちが自分たちを攻めに上ってくることを聞いたとき、彼らは自分たちがペリシテ人の手から救われるように、サムエルにとりなしの祈りを願う。

[9]「サムエルは、乳離れしていない子羊一匹を取り、焼き尽くす全焼のささげ物として主に献げた。サムエルはイスラエルのために主に叫んだ。すると主は彼に答えられた」

「全焼のささげ物」は全身全霊の献身と忠誠を表す。

祈りは個人的に静かに祈って、主と交わりを持つことも大切であるが、この時のサムエルにはペリシテ人からのイスラエルの救いという民族の存亡をかけた緊急の願いが出されていたので、彼の祈りは激しい叫びとなった。すると確かに主は彼の

祈りに答えてくださったのである。

[10-11]「サムエルが全焼のささげ物を献げていたとき、ペリシテ人がイスラエルと戦おうとして近づいて来た。しかし主は、その日ペリシテ人の上に大きな雷鳴をとどろかせ、彼らをかき乱したので、彼らはイスラエルに打ち負かされた。イスラエルの人々は、ミツパから出てペリシテ人を追い、彼らを討ってベテ・カルの下にまで行った」

過去の戦いにおいてイスラエルに勝利していたペリシテ人はこの時も圧倒的な勢力で攻め上ってきたのであろう。しかし、この時は主なる神がサムエルの祈りに答えてくださり、ペリシテ人の上に大きな雷鳴をとどろかせて彼らをかき乱し、それに乗じてイスラエル人は彼らを打ち負かし、ベテ・カルの下まで追撃したのであった。「ベテ・カル」…子羊の家の意。場所不明。

[12]「サムエルは一つの石を取り、ミツパとエシェンの間に置き、それにエベン・エゼルという名をつけ、『ここまで主が私たちを助けてくださった』と言った」

「エシェン」…ミツパ北東約15キロメートルの地と思われる。

「エベン・エゼル」…助けの石の意。この石が置かれた場所は、ミツパから見て北東の地。エルサレムからは北に10数キロメートル。かつてここでペリシテ人との戦いで敗北した地。(4:1) かつての敗戦の記憶を拭い去るために命名されたと思われる。「ここまで主が…助けてくださった」との表現はまだペリシテ人の抑圧が完全には一掃されていないことを暗示している。

[13]「ペリシテ人は征服され、二度とイスラエルの領土に入って来なかった。サムエルの時代を通して、主の手がペリシテ人の上にのしかかっていた」

しかし、完全に屈服させられたわけではない。実際はイスラエルの民はなおペリシテ人の圧政に苦しんでいた。→9:16 この節で言われていることは、サムエルの生きている間、主の手がペリシテ人を防いでいたということである。

[14]「ペリシテ人がイスラエルから奪い取っていた町々は、エクロンからガテまでが、イスラエルに戻った。イスラエルはペリシテ人の手から、その領土を解放した。そのころ、イスラエルとアモリ人の間には平和があった」

これはおそらくエクロンからガテまでの境界線に沿う町々がイスラエルに戻ったということであろう。エクロンもガテもなおペリシテ人の町であり、その領主も健在であった。→6:16~18、27:2、29章

「アモリ人」…カナン山地に住んでいた先住民。かつてヨシュアに率いられたイスラエル軍はカナン地の先住民を一掃できていなかった。→ヨシュア記

[15-17]「サムエルは、一生の間、イスラエルをさばいた。彼は年ごとに、ベテル、ギルガル、ミツパを巡回し、これらすべての聖所でイスラエルをさばき、ラマに帰った。そこに自分の家があり、そこでイスラエルをさばいていたからである。彼はそこに主のために祭壇を築いた」

「ベテル」…ミツパの北約5キロメートルの町。「ギルガル」…ヨシュアに率いられたイスラエル人がヨルダン川を渡って、最初の宿营地とした場所。→ヨシュア4:19 ヨルダン川のすぐ西の地。

ベテルもギルガルもミツパもすべてベニヤミンの領土内にあった。サムエルは毎年これらの町を巡回し、その聖所でイスラエルをさばいた(指導者として統治した)。「ラマ」…詳しい場所不明。エフライムの山地の北西にあったと思われる。そこに自分の家があった。そこは自分の両親が住んでいた家の近くであったと思われる。→1:1-2 彼はここでも主のための祭壇を築いて民を治めた。

サムエルは主によってさばきを受けた祭司エリに代わって、イスラエルの民のために大きな働きをした。その働きは三つある。

①預言者→3:20

②祭司→7:5, 9

③さばきつかさ(士師)→7:6, 15

特にサムエルはイスラエルの危機に際して、民の求めを受けて、主に向かって祈り、それは切実さのゆえに大声での叫びとなった。彼はイスラエルの民と神との間に立って、とりなしをし、助けを求めたのである。

イスラエルの民も今回の戦いには神の箱を担ぎ出してはいない。神の箱という物理的な臨在よりも、預言者であり祭司であるサムエルの祈りにすがった。そして主はこれに答えて神の箱によらず、直接主の手がペリシテ人を打ち破ることを示された。目に見える神の箱ではなく、王でもなく、主なる神ご自身こそ助けであり、力であり、守りであるのである。

サムエルの祈りを主は聞かれた。神と人との間に立ち、罪の赦しを求め、とりなしをし、ペリシテ人との戦いに勝利することを求めるその叫びを主は聞いて答えてくださった。もしサムエルがいなかったならばイスラエルはどうなっていたことであろう。私たちはこのサムエルのとりなしの祈りの姿に、やがて来られる真の救い主イエス・キリストの予表を見る。サムエルはその生きている間、イスラエルを正しくさばき、神の民としてのイスラエルを治め、導いた。しかし、やがて彼も地上の働きを終えなければならない時が来る。それゆえ、私たち罪ある人間にとって、預言者、祭司、王として、いつまでも変わらず、その働きを続けられるお方が必要なのである。そしてそのお方こそ、罪も汚れもない神の御子イエス・キリストなのである。→ヘブル7:23~28